



社会医療法人近森会

発行

2013年11月25日

びるぱ12

Vol.329

www.chikamori.com ● 高知県高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel. 088-822-5231 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

訪問看護ステーションの活かし方



中西所長●「急性期からの退院や慢性疾患で入退院を繰り返している方が訪問看護を利用して安定した在宅生活をおくることができるようお手伝いします。処置や点滴も可能です」



久保所長●「その方の生活の場で非自発的入院の予防やご自身が“こうありたい”をともに探し、ともに見つける過程に準備段階からご一緒させていただきます」

人生の最後は自宅でピンコロリといきたい……、でも家族に迷惑をかけ、痛みや処置が必要になれば、施設に入るしかないだろう、家族に迷惑もかかるし……。と諦めている人が多いのではないのでしょうか。7年後、後期高齢者の大集団が出現してきたとき、施設は満杯となります。そこで上手な訪問看護ステーションの活かし方を提供側と国民目線でしっかり考えてみましょう。

近森会で組織的な訪問医療活動がはじめたのは昭和62年4月に近森リハ病院で立ち上がった継続医療室からです。5年後、国の制度で「訪問看護ステーション」が立ち上がりました。初代所長森下幸子（現高知県立大学助教）を経て現所長中西洋子に受け継がれています。訪問件数は平成17年がピークで11,075件、現在8,500件前後で在宅ケアの掛け声のわりには全国的な下降カーブと同じ流れです。医師の指示別でも、昔は近森リハ病院が主流でしたが現在は5.5%、近森病院12.9%、在宅療養支援診療所28.7%、地域の開業医等52.9%となっています。医療保険対介護保険の利用割合では6対4と介護保険利用者が増加しています。主な疾患は神経筋疾患、脊髄損傷、脳血管疾患、癌などで、自宅で安らかな看取りをする方も増えてきました。ケア内容はバイタルチェック、病状モニタリング、体位交換・移動移乗介助・皮

膚ケア・排泄援助、清潔ケア、心理的ケア・家族への介護指導・リハビリテーションと多岐にわたっています。

一方、平成8年1月に日本で最初の精神科訪問看護ステーションラポールちかもりが初代所長仲野栄（現日本精神科看護技術協会専務理事）によって開設されました。現所長は久保博美で登録利用者数120名前後を対象に年間3200件程度訪問しています。医療保険利用者の疾患で特徴的なことは統合失調症の割合が減少し、気分障害、発達障害、摂食障害の割合が増加し、介護保険利用者でも気分障害の方が増加しています。援助内容も身体面の管理と

精神科的スキルと就労支援や生活の自立まで付かず離れずの関係性の中で利用者のニーズに応じています。

利用者層の増加とニーズに応えるために、病気の悪化を防ぎ、在宅で安心・安全・信頼できる訪問医療の方法があるのだということを実証していかなければならないと考えます。在宅療養を望まれる時は医師やステーションにも是非お声をかけてください。病院とも連携し、退院支援のお手伝いをさせていただきます。

近森会グループ
統括看護部長 梶原 和歌

メディカルスタッフ・ワークウェア 15ソーシャルワーカー

モデル
岡崎 由岐子



ソーシャルワーカーの仕事は、患者さんやそのご家族からの相談に対し、患者さんの立場で治療チームや院外他機関等と連携し、その解決と軽減に向けてさまざまに援助をすることです。新人の頃は白衣を着ますが、自分の意志で白衣を脱ぐ時を決め、その理由を上司に報告することになっています。私服は、専門職として中身で勝負することになるとともに、誰に対しても同じ目線で接するという気持ちが込められています。

近森会では現在37名がソーシャルワーカーとして勤務し、各病棟に配属されていて、患者さんの入院時から積極的に関わっています。患者さんの満足が自分たちの満足につながっていません、と話す彼女たちは病院、地域と患者さんとの橋渡し役として患者さんが安心して治療に専念できるよう、活動しています。



免疫力を栄養であげる

近森病院臨床栄養部

部長 宮澤 靖

臨床栄養部の今昔として何度かこの紙面に掲載していただきましたが、今回は免疫賦活栄養を解説します。

むかしの諺で、「病に罹ったら精のつくものを食べよ」、というものがありますが、先人の生活の知恵で、病気になったら元気の素である栄養価の高い食品を摂ることを勧めています。免疫力を向上して、自己修復力を向上して、新たな合併症を誘発しないようにという教えであります。

現在では「免疫賦活栄養剤」というカテゴリーがあり、とくに術後の免疫

力低下に伴う合併症予防に効果が立証されています。

主にアミノ酸という栄養素がこれに該当するのですが、グルタミン、アル

ギニン、タウリン、核酸などが代表的であり、アミノ酸は皆さんがよく知っている肉や魚に豊富な「タンパク質」は、20種類のアミノ酸が結合して作られています。

むかしは、ニワトリの卵やウナギをよく食べて、病気を克服していたようですが、現在では多くの研究者によりアミノ酸を中心とした栄養素の研究が進んで、より大きな効果が期待されています。

みやざわ やすし

12月の歳時記

ぼけ
木瓜

近森病院臨床検査部
臨床検査技師
今本 隼香



中国原産のぼけは平安時代に日本に伝わり、実の形が瓜に似ていることから「木瓜」となりました。秋に収穫できる実は、焼酎につけて疲労回復の薬用酒として用いられています。

花言葉は、「先駆者」「指導者」です。古くから「長寿梅」と呼ばれ親しまれてきたぼけの花は、めでたい紋とされ織田信長を代表に家紋とした武家は多く知られています。

いもと はやか



絵・総務課
広報担当
公文幸子

須賀敦子は昭和4年生まれ、平成10年に69才で逝去した随筆家・翻訳家で熱的な愛読者がいる。「世界ナゼそこに？日本人」というテレビ番組があるが、彼女のイタリア生活はそのはしりとも言える。イタリア人の夫の死後、帰国して書いた彼女の、短編で人間の物語を紡ぐ「回想風エッセイ」は豊かに実った。

昭和4年芦屋に生まれ夙川で成長、8才（昭和12年）父の転勤で東京に転居、昭和23年19才で新設された聖心女子大英文科2年に編入（第1回生として卒業）、23才（昭和27年）慶応大学大学院入学、昭和28年パリ留学を決意し中退、イタリア経由でパリに行き、秋～冬にパリ大学で比較文学の講義を聴くもフランス語以外に2ヶ国語が必要だったため、昭和29年夏にイタリア・ペルージャの外国人大学でイタリア語を学んだ。「手のひらに入るようなラルースの伊仏辞典をひきひき、たどたどしく読んだペルージャのころの記憶が鮮烈によみがえる。（出典：プロシュッティ先生のパスコリ）」ただしパリでは「大学の勉強もはかどらず、フランス語もいっこうに上達

気儘エッセー 7

世界ナゼそこに？日本人
須賀敦子（その1）



近森病院外科部長
田中 洋輔

しなくて行き詰まっていた私（出典：砂漠に行くものたち）」と苦労はしたようだ。その後の行動力には驚かされる。パリから帰国後NHK フランス語班嘱託で働く間にミラノ・コルシア書店の会報誌を読みその活動に惹かれ、便宜上の奨学金を得て昭和33年ローマに留学、この制約だらけの奨学金を放棄して学生寮を変更、コルシア

書店活動（カトリック左派運動）創始者の神父に会い、昭和34年神父の原稿翻訳を始め、昭和35年コルシア書店会議に参加、夫となるイタリア人と文通、

ローマからミラノに転居しコルシア書店を手伝い始め、昭和36年（32才）結婚。夫を通じて日本の文学作品をイタリア語に翻訳する仕事が舞い込み「滅法と言ってよいくらい翻訳の仕事が好きだった（出典：セルジョ・モランドの友人たち）」彼女は日本近代文学者の25作品をイタリア語に翻訳した（36才）。夫は貧しい下級鉄道員の息子で、苦学して大学を出た知識人だった。その夫が昭和42年急死し、彼女は昭和46年日本に帰国した。平成10年卵巣腫瘍で逝去した。今回は、何故彼女が西欧、特にイタリアに行こうとしたのか、素人ながら推測をしてみたい。

引越し報告 ● 12月1日現行

★訪問看護ステーション

11月26日（火）に管理棟4階から管理棟第二別館5階へ移転しました。

★北館3階病棟

12月21日（土）より個室12室が利用可能となります。

★メンタルクリニックちかもり

平成26年1月に近森病院総合心療センターに統合し、総合心療センターの3階フロアへ移転する予定をしています。

神経内科医はヤクザな医者か

～治療ができなかった医者の時代～

近森病院神経内科
主任部長 山崎 正博



うに呼ばれてもしかたがないですね。

他科も一緒ですが、その当時は検査が少なく、薬剤にしても数が少ない分、いろいろ工夫したように思います。放射線科の先生方はアルコールランプでカテーテル先端の形状を作っていました。また昔は散薬が多く、匙で調剤したことから“さじ加減”と言う言葉が生まれたように、薬剤の微量調整が医者の腕前を發揮する場でした。それだけ患者の理学所見を参考にしながら工夫して治療をしたわけです。今では、その名残りはワーファリンの微調整ぐらいしか残っていないように思います。

昔の医者は、検査にしても、薬調整にしても四苦八苦しながら、患者を身近に感じながら診療してきました。今日の診療からは考えられないでしょうが、このような工夫から得たものは大きかったように思います。今の標準化を目指す医療とは対極にあったわけです。

やまさき まさひろ

研修医時代ですから37年前になります。神経内科医を目指していた頃、

他科の先輩医師から“神経内科医はヤクザな医者やで、そんなとこへいくのやめとき。診断だけして治療ようせんへんや”。治療して退院させることができない、役に立たない医者だからヤクザという意味だそうです。

確かに、当時の脳卒中急性期診療は、診断しても臥床安静、点滴が主でリハビリもしない、いまでは考えられない内容でした。患者を寝かせているだけでほとんど治療をしなければ、そのよ

私の趣味

旅をして散策

近森病院北館
5・6階病棟看護師
野島 文子



コンサートや舞台を見るために東京に行くことがあります。東京に行くとき必ずといって良いほど、新しくオープンした場所や話題になっている場所へ出かけます。高知にいる時に家に引きこもってはほとんど活動しない私が、朝から夜まであっちこっちに出掛けています。

普段なら行列に並ぶこともしないのですが、行列にも並びます。ちなみに行列に並んだ最高時間は2時間ぐらいです。最近では新しくオープンした雑貨屋さんでした。いろいろな場所に掛けるのが、ストレス発散になっているかと思っています。

しかし、食べ物屋さんには行かないので、今度は食べ物屋さんに行きたいと思っています。行きたい店もいくつかあり、店の場所も把握しているので近いうちに行ってみようかと思っています。

のじま ふみこ

同窓会

島原城で記念撮影。前列左から二人目が筆者



近森 正幸

10月の連休、二日間にわたって大学の同窓会に出席した。今年は長崎県の島原で眼科を開業している中村先生のお世話で、ゆっくりと雲仙周辺を楽しんだ。関西組の私たちは一旦大阪伊丹空港に集合し長崎へ飛んだ。伊丹でチケットを受けとるためわざわざ1時間前に集合させられたし、旅館での記念撮影もみんな集まらず、日暮れ直前になってやっと撮るといふ、同窓の気安さからか、なんとも手際が悪い。

宴会の前に、前回の同窓会から二人亡くなったということで友を偲び30秒間の黙祷をした。ところが後にな

ってそのなかの一人がまだ生きていたことがわかり、大さわぎになった。宴会に入ると以前は「病氣自慢」だったが今は「障害自慢」に花が咲く。障害を克服している自慢話になるが、同窓会に出てこれだけでも、みんな元気に毎日を送っているのだろう。話をしてもそれぞれに味があり、医師として地域でたくま

しく自分の役割を担っているのがわかる。

同窓会では互いに利害関係もなく若いころの記憶が蘇って、何十年という時間がふっと消える感じで、楽しい時間を過ごすことができる。学生時代からお喋りだった女医さんは四六時中話しかけてくるし、クラスのマドンナだった女性は60を過ぎたいまでも上品で爽やかだった。次回はぜひ土居先生も誘って出席したいと思っている。

こうして共に学んだ友との同窓会は、みんなが自分の終着駅を意識し始める年頃になったいま、我が身を振り返るいい機会にもなった。

理事長・ちかもり まさゆき

失神診断へのアプローチ



近森病院循環器内科
部長 深谷 真彦

失神・眼前暗黒感などを主訴とする患者さんは多いのですが、一過性に出没する発作であるために、入院時の諸検査では診断確定が難しいことも多い症状です。しかも、失神は救急科、内科、神経内科、脳神経外科、循環器科、精神科など広い専門領域に関わる症状ですので各科

が診療します。産業医科大学医学部不整脈先端治療学教授の安部先生は循環器内科医で、ご専門は不整脈ですが失神の診断と治療にも長年取り組んでおられ、この領域の第一人者です。

今回外来や病棟の第一線で患者さんに接する若い先生方やメディカルスタッフの皆さんを主な対象とし、失神の種々の原因を広く鑑別するレクチャーをお願いしました。

失神の見分け方、とくに「てんかん」



との区別の仕方、けいれんを伴った際の考え方、などなどを具体的な症例呈示をしながら、明日の診療から即役立つ実際の内容でした。血管迷走神経反射など神経調節性失神の具体的な治療法や、不整脈では植込式ループレコーダーの診断的有用性など、非常にためになる内容の講義でした。安部先生有難うございました。

ふかたに まさひこ

お知らせ 医療従事者対象

● 第 124 回地域医療講演会
「タイトル未定」
日時：平成 26 年 1 月 17 日（金）
18：00～20：00（仮）
会場：管理棟 3 階会議室
講師：近畿大学外科学教室
（内視鏡外科手術全般、上部消化器疾患）
教授 今本治彦 先生

● 第 125 回地域医療講演会
「ブルキンエ不整脈：心室期外収縮から心室頻拍・心室細動まで」
日時：平成 26 年 1 月 31 日（金）
19：00～20：30
会場：管理棟 3 階会議室
講師：筑波大学医学医療系
循環器不整脈学講座教授
野上昭彦先生

● 第 126 回地域医療講演会
「がん治療における再建外科の役割」
日時：平成 26 年 1 月 31 日（金）
18：00～19：30
会場：管理棟 3 階会議室
講師：岡山大学大学院
医歯薬学総合研究科形成再建外科学教授
木股敬裕先生

近森会健康保険組合活動報告

ポールウォーキング 鏡川緑の広場から筆山展望台へ



近森会健康保険組合
事務局長 田村 裕彦

23名の職員が集まり、鏡川みどりの広場から天神橋、天満宮を經由して筆山展望台を往復し、約2時間気持ちのよい汗を流しました。

部署や職種の違う者同士で会話も盛り上がり懇親にも一役買ったような気がします。全員無事ゴールし、広場で豪華(?)弁当とお茶を配った頃から雨が降り始めました。

たむら ひろひこ

11月3日文化の日に、当組合初めての院外イベント「ポールウォーキング」を、お馴染みの安岡講師を招いて行いました。天気が心配されましたが

お弁当拝見 20 寒くなってきたら



近森オルソリハビリテーション病院
6階病棟
介護福祉士 池田 朱里



一人暮らしのお弁当なので、特にこだわりはありませんが、強いて言うならば今くらい少し寒くなるとお弁当にもお味噌汁を作って持っていく事くらいです。

そうするとおかずは少なくとも味噌汁の具でカバーできた気分になれ

ます。寒くなると汁物は欠かせませんね。冷え症なので、これからは生姜をたくさん使っていきたいと思えます。個人的に好きなのはすり下ろし生姜を味噌汁に入れることです。色気のないお弁当箱ですが、色々

試した結果これに行き着いてしまいます。これからは見た目も実用性も兼ねたお弁当を探していきたいと思えます。いけだ あかり

日本尊厳死協会四国支部大会 ● 開催報告

質疑応答に答える講師の先生方

終末期のあり方を見つめ直す

日本尊厳死協会高知会長
近森病院副院長 北村 龍彦平成 25 年 10 月 20 日に日本尊厳死協会四国支部大会が高知支部主催で開
笑顔であいさつ、
明るい元気な声がいきかう
職場づくりに向けてPS サポーター 1 期生 画像診断部
田村 淳也

キラッと光る職員を見つけに私たち PS サポーターがあなたのその笑顔を求めて、ラウンドを始めています。まだ、プレラウンド中ではありますが、職場の雰囲気や対応面などいいところを拝見し、また、ハード面など気づいたことなどを改善していけるように検討しています。職員マナー向上のために私たちにでも出来ることを見つけて、PS サポーターとしての活動を行ってきたいと考えています。

どうか、期待と温かい目で、よろしくお願致します。 たむら じゅんや



「いつもありがとう」。勤労感謝の日を前に、園児たちから感謝メダルが贈られました。



催されました。テーマは「終末期と尊厳死の法制化」で、司会の北村から開催の趣旨と情報提供があり、引き続き専門とお立場の異なる 5 名の講師によるシンポジウムが行われました。

野元四国支部長には尊厳死協会の立場から、大井田高知県医師会副会長には医師の視点から、中橋弁護士には法曹界の視点から、また急遽欠席ながらメッセージを寄せていただいた小林元

慶応義塾大学教授には犯罪学の視点から、中谷衆議院議員には議員連盟の視点からご講演をいただきました。

その後、フロアの方々からの質疑応答を含め、講師との討論も活発に行われ、終末期のあり方を見つめ直す有意義な機会となり、盛会裏に終わることができました。関係者の皆さまに感謝いたします。

きたむら たつひこ

院外エッセイ

闘いとリラックスの融合

岡田 淑子

●おかだ よしこ 高知県武術太極拳連盟理事長。1958 年 10 月、現いの町生まれ。京都で過ごした大学時代に見た太極拳に、24 歳のとき高知で初めて出会う。30 歳のとき、太極拳の盛んな香川で現在の師匠に出会い、以来試合に挑戦。1993 年 10 月、連盟設立



「心静体鬆」という言葉があります。心を静めて体をゆるめるという意味なのですが、太極拳を行なう際に要求される心身の状態を言い表わしています。

太極拳は仮想敵対動作、つまり闘うポーズを練習する中国武術の一種です。「闘い」と「リラックス」、対極にあるような両者の融合が太極拳の魅力であり、難しさでもあります。

太極拳を学び始めたのは 31 年前、ゆっくりの動作なのに真似できない不思議な動きの秘密を解き明かしたいという思いがいちばんの動機でした。当時は型を覚えるのが楽しく、次々と色々な種類を覚えてもらいました。「覚える」イコール「修了」のような浅はかな学び方でした。

1990 年、東京在住の現在の師に出会い、その動きと指導内容に衝撃を受けました。それまでの自分が恥ずかしく、もっと奥深く学びたいと師事し、そのなかで色々なことに導かれ気づかされ、あっという間に 23 年になります。冒頭の「心静体鬆」という言葉の世界も実感として少しは分かるようになりました。

精神状態は微細な筋肉の動きに影響

します。微妙な動きのコントロールには心のコントロールが必要ですし、柔らかな太極拳動作が出来たときは、心も穏やかになっているようです。心が体を動かし、体から心にフィードバックする、「病は気から」というのも頷けます。

さて、「30 年も続けているのだから、さぞかし健康でしょう」とよく言われます。とりえず深刻な持病はありませんし、入院したこともありませんので「健康体」とは言えます。

じつは私は幼い頃から腰痛や肩こり、頭痛持ちで、思春期になると様々な不定愁訴に悩まされていました。不安と緊張のなかで暮らしていたからだ、今ごろ気づいている始末です。

太極拳を通して、無心に自身の体を見つめ、心に気づくという習慣がついたおかげか、近ごろは健やかな中年時代を過ごしています。

さて、これから。いままも多少のガタはありますし、加齢による症状が次々出現もするでしょう。が、心だけは老化に抗い、「太極拳魂」で健やかに自分の体とつきあっていきたいと願っています。

GE Japan Executive Program 2013 全職員が リーダーシップをもって

近森リハビリテーション病院
事務長 内田 陽子



2013年9月29日～10月5日、GEヘルスケア主催のアメリカ研修に参加しました。当研修は、GEの経営手法を学ぶとともに、現地のIT先進病院見学を行うものです。

研修前半はニューヨーク郊外のGE企業内研修施設で行われました。GEは、1892年にトーマス・エジソンが設立し、1896年よりダウに指標銘柄登録し続けるアメリカ唯一の会社で、人材・組織強化が企業成長の礎であるという考えのもと、リーダーシップ開発といわれる人材育成に力を入れています。職員のやる気を引き出し、階層・

境界のない組織の作り方について学びました。

研修後半は、ニュージャージー州のバーチャヘルスとペンシルベニア州のUPMC（ピッツバーグ大学メディカルセンター）を訪問しました。バーチャヘルスでは、RTLS（Real Time Locating System）の導入事例を見学しました。

RTLSは、医療従事者、患者、可搬式資産にタグを装着し、通信ネットワークを利用してタグを感知し、院内端末にて常時モニターするシステムで、モニター対象の行動パターンや状

態を把握し、その結果、可搬式資産の最適化、院内感染予防対策、患者や医療従事者のワークフロー管理が実現していました。

UPMCは、海外にも拠点、提携先をもつ病院で、その国際的な総合医療ネットワークの構築、運営について学びました。高いテクノロジーを有する企業と上手にコミットし、また助手を多く採用することで、専門職がより専門性を発揮し、効率のよい医療を提供していることを実感しました。

オバマケアを巡って予算案が成立せず、政府機関が閉鎖する事態に陥るなかでの滞りでしたので、医療制度の在り方の難しさについても改めて考えさせられ、アメリカの医療事情をよく理解できました。

変化が著しい現在、環境変化にスピーディに対応する必要があります。新幹線が速いのは、全車両にモーターがついているからで、全職員がモーター（リーダーシップ）を持つことで、遂行力が高まると研修は締められました。私もこの研修で得たことを活かし、組織の一翼を担うべく努力する所存です。 うちだ ようこ

高知フィジカルクラブ in 近森病院

初期研修医 佐島 和晃

10月26日に平島修先生を招き、身体診察をテーマにした部活を開きました（先生の詳細は、フィジカルクラブのHPをご覧ください）。



栄養士、薬剤師、看護師（師長さんも！）、学生、研修医、中堅～ベテラン医師と、50人もの方々に参加いただきました。部活というだけあって、屋外でのダッシュなどを交えたハードな内容となりました。

今回の企画の趣旨はCoproductio（協働）でした。チームスポーツ（あるいはチーム医療）でのパフォーマンスは、絶対的エース（あるいは優秀な一人のスタッフ）よりも、チームワークや目的共有度に依存していると感じます。このような機会を通して近森の「協働」力がさらに高まるといいなと思います。 さじま かずあき



ワイン講座 ● 17

日本のワイン その4

熟成にこだわる

いま日本のワイン生産者は、日本固有品種「甲州種」の可能性を見出すべく、独自の醸造方法や貯蔵方法に積極的に取り組み、固定観念に捕らわれない挑戦を続けています。

泡の出るワインの熟成期間は、各国さまざまで、ゼクト（ドイツ）、カヴァ（スペイン）は最低9カ月。そして、フランスのシャンパーニュは15カ月。瓶内での熟成期間が長ければ、泡がよりきめ細かく、クリーミーな舌触りになります。

2013年3月6日行われた国際オリンピック委員会の評価委員を招待した官邸夕食会では、アルガ・ブランカ・ブリリヤンテが使用されました。

このワインの瓶内熟成は36カ月と、単純に炭酸ガスを詰め込んだスパークリン

アルガ・ブランカ・ブリリヤンテ 2007/勝沼醸造/山梨県甲州市勝沼町●ブリリヤンテはポルトガル語で“燦々と輝く”という意。その名の通り黄金色に輝くシャンパーニュのような泡立ち。年産8400本。

グワインではなく、一本一本瓶の中で二次醗酵という、手間のかかるシャンパーニュ方式で造られています。日本を代表する1本といっても過言ではありません。

甲州種で造られたものは、果実の優しさ、膨らみがあり和的な繊細なスタイルになっています。特別な日の贅沢な食前から食中酒としても、幅広く楽しめます。

鬼田知明
（有限会社鬼田酒店代表）

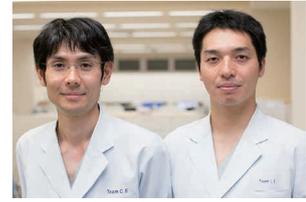
次回の予定/日本のワインその⑤ 10年先を見てのワイン造り



第121回地域医療講演会（実習編）

第5回心臓血管ウェットラボ

当番幹事・臨床工学部急性期CEチーム 主任 和田 英大
橋本 将幸



和田さん(左)と橋本さん(右)



『ウェットラボ』これは無菌豚の心臓を用い、濡れた状態（ウェット）で実際に触ってみたり、治療法をやってみて学ぶ勉強会です。

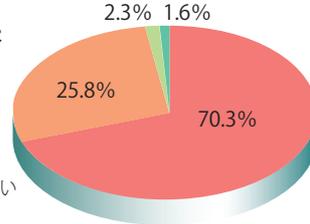
隔年開催で行っているウェットラボですが、今回も県内外から医師、研修医、学生、看護師、栄養士、検査技師など多くの職種の方々の参加で総勢189名の大規模な実習となりました。内容は心臓解剖、心臓病理、PCI・ステントなどのカテーテル治療、刺激伝導系のアブレーション、冠動脈バイパス術、人工弁置換術、大動脈ステントグラフト、心臓エコーなど、テーマ別に分かれたテーブルをローテーションする方式で、午前9時から約6時間みっちり勉強しました。

まず、高知大学医学部 北岡先生による冠動脈オリエンテーション、渡橋先生による心臓弁オリエンテーションをして頂きました。その後、前回のアンケートで人気の高かった心臓解剖実習を長めに取りすることで、より有意義なプログラム作りを目指しました。最初に全員が解剖を学ぶことで「印象深かった」との声も届いています。

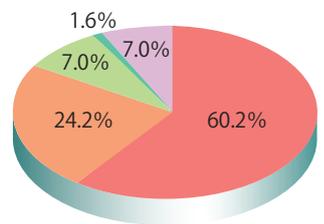
アンケート結果 (全参加者)

- そうである
- どちらかと言うとそうである
- どちらでもない
- どちらかと言うとそうではない
- そうではない
- 未記入

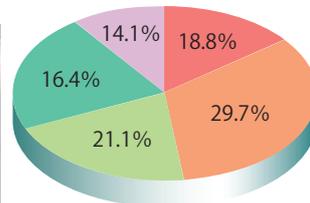
① ウェットラボの開催時間（開始時間）は適切だと思いますか



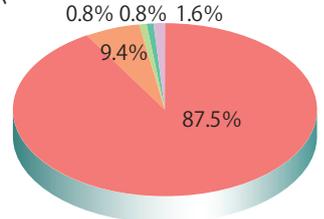
② 実習項目（全10種類のブース）数は適切でしたか



③ ウェットラボの各ブース時間配分（25分）は短かったですか



④ 今回のウェットラボは有意義な実習でしたか



▲当日の参加者は189名でした

普段見ることがない心臓を実際に手にとって触れながら体感し、PCIや冠動脈バイパス術、人工弁置換術では、専門の先生方に実際の手技を指導されながら体験し、みんなで勉強する事で、理解が深まったことと思います。

今回のウェットラボも、インストラクターの熱意、また参加者の学ぶ意欲で会場は熱気につつまれ、活気あふれる会となりました。大規模でありながらスムーズな進行であったことを、インストラクターやスタッフ、参加者のみなさんに感謝したいと思います。みなさん、本当にありがとうございました

た。回を重ねるたびに規模・質ともにグレードアップするウェットラボ、今回はTAVI（経カテーテルの大動脈弁植え込み術）のブースができるのでは！？と期待しながら、2年後の開催を早くも楽しみにしています。

わだ ひでとも
はしもと まさゆき

参加者の感想 ● 色々な職種に門戸が開かれた素晴らしい会でした／通常では経験できない貴重な体験ができ、明日からの仕事に生かしていきたい／どのブースも魅力的で参加でき、大変楽しかった、明日からの仕事に生かしていきたいと思いました。

看護部 臨床能力評価について

近森会グループ看護部
認定評価委員会委員長
統括看護部長補佐

岡本 充子



レベルに応じた星マークシールを名札に



看護部ではこれまで経験年数に応じた研修を行い人材育成に取り組んできましたが、大多数を占める中堅看護

師の育成が大きな課題となっていました。そこで、個々の能力に応じた育成ができるようにこれまでのクリニカルラダーを見直し、2012年より臨床能力評価を導入しました。

現在、

- レベルⅠ（職場での指導や教育を受けながら看護実践を行うことができる）：89名、
- レベルⅡ（所属の臨床場面において看護実践を一人前にできる）：22名、
- レベルⅢ（優秀な看護実践に加え、組織的な役割遂行ができる）：10名、
- レベルⅣ（所属の臨床場面においては卓越した看護実践を実施し、組織的にも広範囲な役割遂行ができる）：6名、が認定されています。

この制度を利用し、自己の目標を明確にし、看護師として成長していったらいいと思います。また、他院での経験をもって入職される看護師も増えてきており、これまでのキャリアを活かしその能力に合った支援にも活用していきたいと思っています。

おかもと じゅんこ

ハッスル研修医 貢献できるよう



初期研修医 時信 麻美

近森病院で研修医生活をスタートし、早くも半年が過ぎました。現在まで内科をローテートさせて頂きましたが、とても充実した毎日です。

上級医の先生方は、お忙しい中熱心にご指導くださり、深夜の呼び出しや当直が重なっても精神的に病棟や検査をこなされ、本当に尊敬するばかりです。また、コメディカルの方々は大変知識深く、患者さんの小さな変化にも細やかに気づいてくださり、研修医にとっては実に心強い存在です。

病棟や当直といった医師としての業務にも少しずつ慣れ、成長できたかなと思うこともあれば、うまくいかず落ち込むこともしばしばです。経験不足や体力不足でご迷惑をお掛けすることが多いですが、周囲の方々の支えがあって無事に乗り切ることができており、このような環境で研修できることを幸せに感じています。

微力ではありますが、患者さん、病院に貢献できるよう頑張りたいと思います。これからも、どうぞ宜しくお願いいたします。

ときのぶ あさみ

リレーエッセイ

伝統行事に参加して ～暑い熱い夏の思い出～

近森病院臨床栄養部
管理栄養士

川野 結子



私の故郷は奄美大島です。「奄美大島」聞いたことはあるけど…どこにあるの？とよく尋ねられます。鹿児島県ではありますが、地理的にも文化的にも沖縄県に近く、独特な文化を持ちエメラルドグリーンのにぎやかな美しい島です。

奄美での夏の風物詩といえば「舟漕ぎ大会」です。島民みんなが力を注ぐ夏の暑い熱い行事です。波しぶきをあげてとても迫力があります。私はこの行事に毎年参加していました。とてもきついです。漕ぎ終わった時の達成感と、なによりとても感動します。

ここ高知にも「よさこい」という熱い行事があり私も参加させて頂きました。始めはばらばらでも、練習によりきれいに縦横列がそろった時はなんともいえない感動があり踊りにも力が入りました。今年のテーマは「花蕾」。種をまき水をやり時に肥料という厳し

▼写真は今年8月31日に行われた「舟漕ぎ競争」の様子で、「あまみ Shop どっとコム」の城康弘さんのご好意により掲載



い練習もありましたが、日を追う事に全体がまとまり本番には見事美しい花を咲かせることができました。

「協力して力を発揮する」近森病院のチーム医療の実践に通ずるものがあります。入職して早半年、自分の力不足に落ち込む日もありますが、チーム医療の一員として私も花を咲かせられるよう日々精進していきたいです。

かわの ゆいこ

じっくり慈しむ心で…

心優しいエピソードがいっぱい

少し前のリレーエッセイ欄に怪我した犬を拾って以来の散歩が日課という話が掲載された。今回、宮崎洋一副センター長をはじめ、仲間のスタッフからも「なかなか出来ることではないエピソードがたくさん。ぜひ聞き出してあげて！」との特命だったが、ご当人はいかにも聞き役の似合いそうな、患者さんの話にじっくり付き合うタイプの心優しい人だった。

ひとの役に立っていると

スッキリ分かる仕事に就く

高校時代、周りの受験生に混じって、いわば流れで受験し、新設の環境システム工学科で2年近く勉強した。

が、「どうも自分のなかで何をやりたいのか方向性がはっきりしなかった」。そこで、大学の恩師の先生とも両親とも話し合った結果、「やっていることがひとの役に立っているとスッキリ分かるような、例えば医療の仕事はどうか」と勧められ、それならば看護学校があると即決で方向転換。准看護正看で4年学び、近森会を志したのは、「就職先で親を安心させるならネームで選ばうとした」結果だった。いまでも親には職種も就職先も喜ばれているのだと、嬉しそうに話してくれた。

自分のひと言の重み

看護学校時代、オペ室の実習だけは科目になくて、就職後はオペ室自体に興味があった。急性期中の急性期で、一分一秒が患者さんの生命を左右するような緊張感。そんななかで、「とにかく石の上にも三年は頑張る！」と、緊張感いっぱいの日を送った。

ちょうどそんな時期に再会した看護学校同期の友人は精神科勤務だった。話を聞いて、「一分一秒にハラハラしなくて済む職場が自分には向いているかも知れない」と、精神科への異動を希望した。

いま、秀彰さんは「患者さんと触れあう時間がいちばん長い職場」で、じっくり患者さんに向き合っている。「こんなにもコミュニケーションが大事で、こんなにもコミュニケーションを取るのが難しいなんて…」と思い知らされているという。患者さんと接する自分のひと言の重みに気づかされ、ある状態で取った態度が、似たような状況の別の患者さんには通じない。個別の対応の大事さが身にしみるのだ。

「5年も経ってまだまだ勉強することばかり」なのは、向学心に溢れるというよりも頼りないと思われるかも知れませんが…と気遣いつつ、「患者さんについての分かりやすい情報以外の、奥に隠れた情報をいかに知るかの難しさ」にしばしば直面するという。

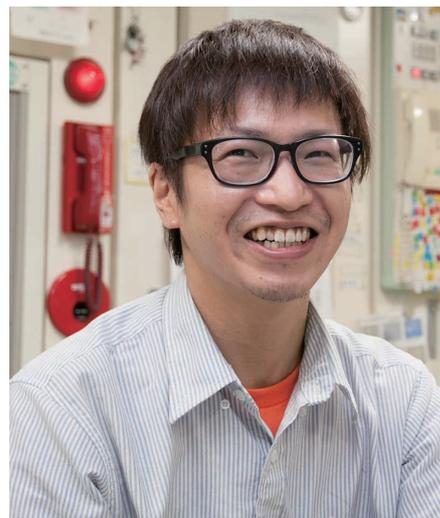
そういう意味で勤めて5年はまだまだヒヨコだから、閉鎖病棟から他への異動希望はいまのところ出さないつもりだ。

イッパチ、イッキュウと七人家族

郊外の一軒家に引っ越す途中に出会った怪我を負った雑種犬は、治療の甲斐あり、すっかり家族の一員になっている。「イッパチ」という子どもに付けたかったが家族に反対されて付けられなかった名は、ゲームのキャラクターから取った。そのイッパチが散歩の途中に見つけた、まだ目も見えていなかった赤ちゃん捨て猫は、イッパチの次に増えた家族なのでイッキュウ。

「龍(りゅう)」の響きが好きで子どもに付けたかったが、長男はおよそ龍というイメージではなく、それならばと「虎」の字を冠し虎太郎。昨年生まれた次男にはイメージに合う「龍之介」と名付けた。

やはり精神科に勤める看護学校同期だった妻紗希さんと、長女の結衣ちゃん、田んぼと緑の多い最高の生育環境で、五人と二匹の大家族は楽しくて忙しくて賑やかな毎日を送っている。



▲「5年も経ってまだまだ勉強することばかりです、などといってもおれないのですが…。患者さんとの関わりは、ここまでで十分という線はないですねえ……」。



▲イッパチに猫のイッキュウも加えて合計七人家族で記念撮影をしたかったのですが、イッキュウちゃんほどこまでも自分のペースを押し通すタイプでした……(笑)

編集室通信

去年の秋から北館・心療センターには午後暖かい日が差していましたが、旧本館の建築が進み影が少しずつ高くなってきました。来年の秋は地上13階の建物が完成して日差しは少なくなるかも知れませんが、道路を囲む両側の紅葉を楽しみにしています。 和

図書室便り (2013年10月受入分)

- ・創傷のすべて キズをもつすべての人のために / 安部正敏 (他編)
- ・V.A.C.ATS 治療システム実践マニュアル: 局所陰圧閉鎖療法 / 市岡滋 (他編著)
- ・図説新肩の臨床 / 高岸憲二 (編)
- ・リウマチ診療のための関節エコー撮像法ガイドライン / 日本リウマチ学会関節リウマチ超音波標準化委員会 (編)
- ・乳腺細胞診カラーアトラス 新版 / 北村隆司 (編)
- ・心血管インターベンションエキスパート4 カテーテルアブレーション実践テクニック / 山根禎一 (他編)
- ・新目でみる循環器病シリーズ3 心臓電気生理検査 / 大江透 (編)
- ・平成24年版看護白書 テーマ: 災害時における看護の力・組織の力 / 日本看護協会 (編)
- ・看護基準・手順見直し・改善標準テキスト [第3版] / 小川裕美子
- ・図解入門メディカルサイエンスシリーズ よくわかる栄養学の基本としくみ / 中屋豊
- ・日本の医療危機の真実 いまこそ求められる医療制度改革 / 南和友 (編著)
- ・診療記録監査の手引きー医師、看護師等の諸記録チェックマニュアルー / 東京都病院協会診療情報管理委員会 (編)

《別冊・増刊号》

- ・別冊・医学のあゆみ 自然免疫 Updateー研究最前線 / 竹内理 (編)
- ・別冊・医学のあゆみ 自律神経による調

- 節とその破綻 / 熊谷裕生 (編)
- ・別冊 NHK きょうの健康 慢性腎臓病 (CKD) / 富野康日己 (総監)
- ・臨床放射線別冊 新版前立腺癌放射線治療のすべて リスク別アプローチから合併症対策まで / 青木学 (他編)
- ・日本医師会雑誌第142巻・特別号(2) 神経・精神疾患診療マニュアル / 飯森真喜雄 (他編)
- ・関節外科 32巻10月増刊号 四肢骨折治療における問題点と対策 / 齋藤知行 (編)
- ・臨床画像 29巻10月増刊号 症状からアプローチする画像診断: 知っておいてほしいCT / MRI 所見 / 後閑武彦 (他編)
- ・精神科治療学 Vol.28 増刊号物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック / 「精神科治療学」編集委員会 (編)
- ・HEART nursing 2013年秋季増刊 受入から退院まで マンガで身につく急性心筋梗塞パーフェクトブック / 四津良平 (他監)
- ・INFECTION CONTROL 2013年秋季増刊 “くまなくさん”と学ぶ らくらくわかる感染対策の教科書 / 櫻井滋

《視聴覚資料》

- ・よくわかる・すぐ使える実践看護 ②多重課題トレーニング / 横田弘子 (監)
- ・抗菌薬感受性検査のための標準法ー第23版 (M100-S23) / 日本臨床微生物学会 (監)
- ・Audio-Visual Journal of JUA VOL.19 NO.4 / 日本泌尿器科学会 (監)

2013年10月の診療数 システム管理室

近森会グループ

外来患者数	18,670人
新入院患者数	915人
退院患者数	838人

近森病院

平均在院日数	13.32日
地域医療支援病院紹介率	82.06%
救急車搬入件数	424件
うち入院件数	220件
手術件数	454件
うち手術室実施	294件
→うち全身麻酔件数	158件

● 平成25年10月 県外出張件数 77件 延べ人数 158人 ●